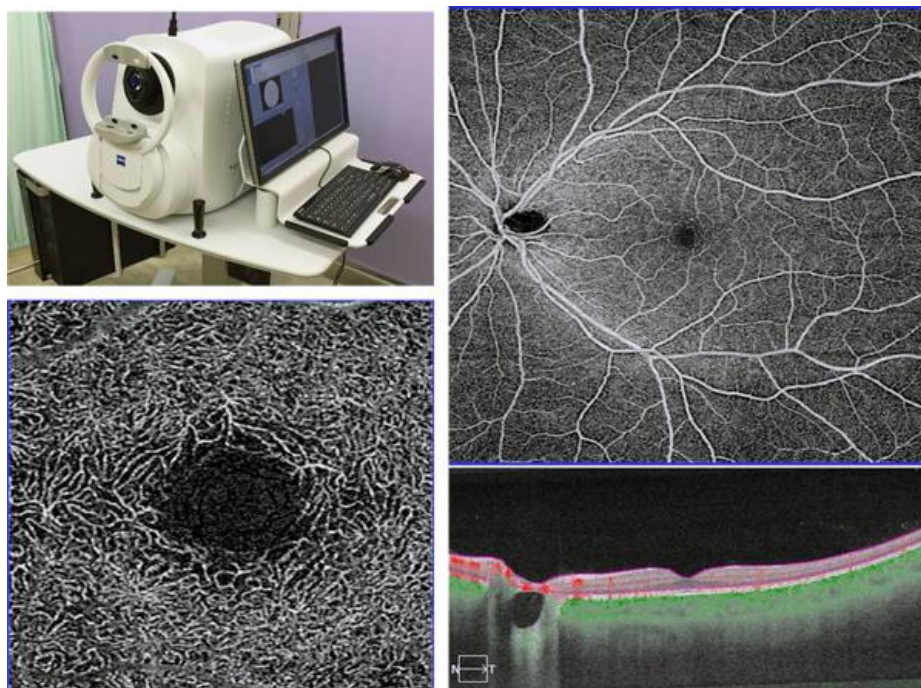


黄斑疾患、糖尿病網膜症、網膜剥離、血管閉塞性疾患などが含まれます。近年、この領域においては、眼底診断機器および分子生物学をはじめとした基礎医学の進歩を背景として、病態解明と治療薬の開発が飛躍的に進歩しました。臨床においても、診断学と従来からあるレーザー治療・硝子体手術だけでなく、光線力学的療法や抗血管新生療法(血管内皮増殖因子をブロックする分子標的薬剤を使用)などの新しい治療学が確立してきています。加齢黄斑変性は欧米では失明原因の第一位でわが国でも急増している疾患です。本症では黄斑部に脈絡膜由来の血管新生が起こりますが、部位的にも治療が困難で、進行すると高度の視力障害を来す難治性疾患です。当科では、加齢黄斑変性に代表される脈絡膜新生血管に対して、補償光学眼底カメラ(rtx-1)、眼底微小視野計(MP-3)、高侵達 OCT(DRI-1)などの最新の検査機器を用いた診断と病態研究を進めており、さらにその検査結果をふまえて、新しい治療法を積極的に導入して良好な結果を得ています。

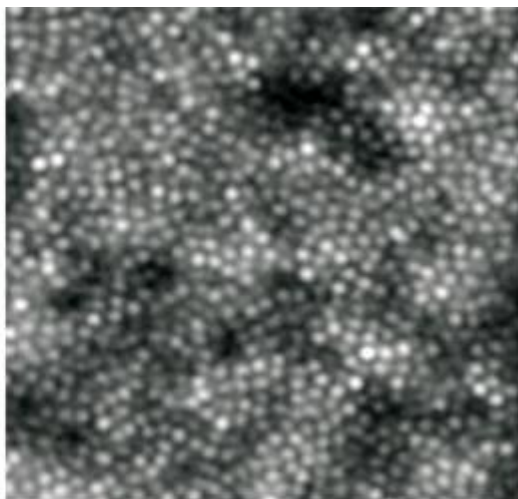
加齢黄斑変性は、すでに欧米では高齢者の視力低下の第1位となっており、最近、わが国でも急増している疾患です。この病気では黄斑部に脈絡膜由来の血管新生が起こりますが、部位的にも治療が困難で、進行すると高度の視力障害を来す難治性疾患です。類縁疾患の中心性漿液性脈絡網膜症や糖尿病網膜症や網膜血管の閉塞による起こる網膜静脈分枝閉塞症による黄斑浮腫に対しても最新の診断、治療をおこなっています。

【診断】低侵襲、高精度 診断

これまで黄斑疾患の確定診断には、血管に造影剤を注入する蛍光造影検査が必要でした。しかし、この検査では造影剤により気分が悪くなったり、場合によっては体調に影響が出ることもありました。当科では、最新機器である光干渉断層血管撮影(OCT angiography)を2機種、導入し、造影剤を使わない診断を目指しています。これまでの蛍光眼底造影に完全に取って代わることはいまだできていませんが、従来に比べて、蛍光造影の機会を減らすことができる様になりました。疾患によっては、従来の蛍光眼底造影より、明瞭な画像がえられることもあり、診断精度の向上にも貢献しています。



他にも、視細胞を直接観察できる検査機器 (rtx1)や眼底をモニターしながら網膜の感度を測定できる機器などを使い、より精度の高い診断を目指しています。

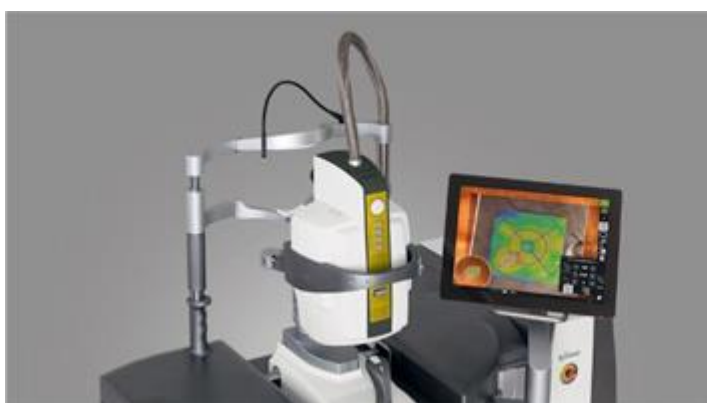


【治療】選べる治療

黄斑疾患の治療には抗血管新生薬(抗 VEGF 薬)、パターンスキャンレーザー、光線力学的療法、ステロイド局所投与、硝子体切除術手術など多くの治療法が用いられています。当科では、これらすべての治療を受けることが可能です。このため多数の治療手段の中から、患者さんに最適の治療を選択することができます。また、患者さんも、自分に適したいくつかの治療法の中から最も自分に合った治療法を選択することができます。

多数の治療経験があり、抗 VEGF 療法は年間 6,000 件以上、硝子体手術は 500 件以上の例を治療しています。硝子体手術に関しては、雑誌等で治療例数の多い施設として紹介されております(2017 年版『手術数でわかるいい病院』(週刊朝日・臨時増刊)など)。

最新の治療として、ナビゲーションシステムレーザー(NavilasR)を用いた治療も行っています。この機器は自動追尾機能を持つレーザー凝固装置で、様々な画像診断結果をレーザー装置に読み込ませ、ピンポイントでレーザー凝固ができる装置です。これにより安全かつ正確なレーザー照射が可能となり、これまで治療対象にならなかった症例に対しても治療が可能になっています。



加齢黄斑変性に対する光線力学的療法は、わが国では平成 16 年 5 月に厚生労働省の認可を受けました。当院では全国で 2 番目に、東北地方で初めてこの治療法を導入し、現在も治療例数は全国でもトップクラスです。現在、加齢黄斑変性に対して主力となっている治療法は、平成 21 年 3 月に認可された抗血管新生薬を用いた治療です。積極的に臨床治験の段階から参加し、最新の治療をいち早く提供できるよう心がけております。